

令和5年度 文京区障害者地域自立支援協議会  
第3回権利擁護専門部会要点録

日時 令和6年2月19日(月) 午後2時～午後4時  
場所 文京区民センター3A会議室

1 開会

2 議題

(1) ケースを通じたライフステージ(ライフイベント)における意思決定支援について

【松下部会長より趣旨説明】

専門部会は長年にわたり権利擁護の制度や意思決定支援をテーマに話し合ってきた。地権や後見制度、信託など制度のパンフレットは揃っているが、前段階の準備の話はあまり示されていない。また、制度利用後は後見人任せ、支援者離れもあり、チームを継続させていくことについて説明が不足しているという意見もあった。

また、委員それぞれが日常的に対応している障害者像も様々であるため、1つの事例を通して違いを共有することで話が進みやすくなるのではないかと考える。今回は施設入所を検討した知的障害者の方の事例を基に、今後備えておくべきことを具体的に共有する時間にしたい。

【松下部会長より前回の振り返り説明】

資料第2号「ケースを通じたライフステージにおける意思決定支援について～自立(一般就労)を目指す方の事例～ケース①30代知的の方」、

資料第3号「ケースを通じたライフステージにおける意思決定支援について～自立(一般就労)を目指す方の事例～ケース②20代精神の方」に基づき、説明。

【事例のケース紹介およびケースから見えてくる特徴について説明】

資料第5号「事例(知的障害)<当日席上配布・要回収>」に基づき説明。

【事例のケースに対する質疑応答】

●本人の年齢は65歳未満か。

⇒65歳未満。

●主治医との関わりはどの程度か。

⇒精神科に月1回と、内科にも定期的に通院している。姉も不安障害の発症以降は精神科にかかっている。

●本人が自宅に戻ってから姉の状態はどうか。

⇒姉の支援者ではないので詳細は聞けないが、3か月間入院の後、自宅療養を経て今年

1月からB型作業所を利用している。

●「本人を家族で支援するのが難しい場面が増えるのを心配した父母から相談があった」  
とのことだが、具体的にどのような心配があり相談が来たのか。

⇒通所以外は自宅で過ごしており、食事、入浴、それ以外の時間の過ごし方について、常にマンツーマンで介助が必要であり、生活全般について心配があった。

●「本人に事前予告すると不穏になることも予想された」というのは、具体的にどのような状態になることが予想されたのか。

⇒他害がもともとあった方。自傷はないが、ひっかき等あったため、他害行為を心配した。また、身体が大きいため、動くだけで周囲の方とぶつかることもある。

●姉の不安障害は本人が入所してから初めて発症したのか。

⇒母曰く、姉は就労していたため本人の支援には全く関わっておらず、本人が施設に体験入所してから不安障害になったとのことだった。

●事前予告すると不穏になることが予想されるということは、ある程度の理解力や想像力がある方なのか。

⇒通所施設に12年通っていたため、通所施設の支援員に相談したところ、通所先ではイベント等の知らせをしても特に変らないが、「もうここに来られなくなる」と説明して本人がどうなるかは予測ができなかった。

●本人、両親の年齢は。

⇒本人は30代。両親は60代～70代。

#### 【事例に対する意見・感想】

●事例を見て自分の友達に似ていると感じた。友達の姉が知的障害者で通所施設に通っていたが、親が病気になり、今は施設にいる。両親とも病気になってから結構大変だったようだ。2年前にその友達と再会して話を聞いたが、姉は週末には入所先から自宅に戻り、両親と買い物に行っていると聞いた。この人は週末自宅に帰ったりしているのか。

⇒この方は結局入所しなかったため在宅で生活している。重度知的で入所した方の話をすると、週末や長期休暇に自宅に帰る人もいる。自宅で過ごすことが難しく、サービスを利用しながら生活する方もいる。遠方の施設に入所している方は週末に帰ってくることはなかなか難しい。

●重度知的障害がある方の後見監督人をしている。その方は母親が後見人をしているが、自身が高齢で本人の世話ができなくなりつつあるにもかかわらず、母はなかなか変化する方向に行けず、悩むことがある。早く相談しなくてはと思うが、安定していた生活がその変化で崩れてしまうこともありバランスが重要。もし私が相談を受けたら、バランスを取りながら後見の話をしていく。私たちは、どうにか本人の生活を変化させようと思いがちだが、本人に不安がない状態をどうやったら長くつくれるか。解決型より伴走型支援の考えを持ってやっていかなくてはいけないと思う。

- 母親がここまで病気になっても頑張ろうとしてしまうことに対してみんなで検討する場を持てると良い。姉の関係者と本人の関係者、双方のサービスの人が集まり、お互いの視点から検討することが必要。本人の考えを代弁したり、本人が施設でもうまくやっていけることを母に共有することで母の不安を取り除ければと思う。母としては急に施設は抵抗があると思うので、ショートステイの利用回数を増やしたり。在宅サービスが入る余地はあるか。

⇒提案はしたが、「家の中に人が入るのは嫌」とのことだった。施設入所については5年前にも話が挙がり、体験入所もしたが、母の反対で入所の件はなくなっている。

- 経済面に余力があれば後見人を立てることも選択肢として必要ではないか。余裕がなくても利用支援制度を使える。家族や、精神科の病院、生活介護事業所等、関わっている機関を全て図式化して情報整理することで、何が不足しているかが明らかになり、キーパーソンも明らかにできると思う。ショートステイは、1か所ではなく2つ3つ利用する中で比較検討してもらいながら本人に合った居場所を見つけてもらえるといいと思う。
- 支援が必要なのは母のメンタルではないかと感じた。本人は「このまま施設に」という意思があったと思う。母に現実を知っていただくには、誰がどのような形で伝えるか。父母からの相談とのことだが、相談の主体は父か、母か。

⇒母に行ってこいと言われて父が相談にきた。

- ショートステイ開始時に本人に意向を確認できるといいが、他害の可能性もあるとのこと非常に難しいと感じた。こうした知的障害の方に対して、どうやったら不穏にならないようにお伝えできるのか、若いうちから経験があったら違うのか知りたいと思った。
- ⇒周りが危惧するよりも案外そうでもないパターンもあるし、短時間でも家族と離れて少しずつトレーニングしている人は、本人も家族も周りも慣れていくので受け入れやすくなるように感じる。

- 「変化に対する不安」というワードがあったが、今回のケースは一度にいろいろな変化が起きてしまったようなケースで、みんなが不安な思いを抱えていると感じた。父の立場で考えると、父も自宅で母や姉を見ており、負担がかかっている気がかり。家族みんながきちんと自身の負担にならないような方向に繋がればよいと感じた。

- やはり大事なのは母の支援だと思ったが、母の相談やカウンセリングができるのはどこなのか、資源があるのか。がんで通院していれば病院のソーシャルワーカーもいるかもしれないが、自宅の子どもの状況をわかっているわけではない。また、この方は施設が見つかっていても入らなかったということで、なかなか施設が見つからない中でチャンス逃したことがもったいないと感じた。

- 4点ポイントがあると感じた。本人の認知機能が低下すると、入所時は家族がいっぱいいっぱい本人に言わずに施設に連れてくるのがほとんどだが、障害や認知症があることで本人が説明を受ける機会がないというのはどうなのか。母のがんについて本人はどのように説明を受けているのか、施設入所の過程は説明を受けているのか。障害の有

無に関係なく、本人の状態について説明を受け、認識することが必要ではないか。また、母の思い込みが心配。姉の入院の経過などについてきちんと説明を受けたのか気になる。母が正しく認識することの支援が必要。父も、心配があるまま本人が戻ってきているため伴走が必要。姉の状態を正しく把握して誰が家族に伝えられるか。世帯全体の支援をしないと本人の意思決定や自己決定に繋がらないと思う。意思決定支援をして他害行為が出てしまうのは良くないが、すべき説明はした上でそうした状態にならない配慮や、そうした揺れる気持ちを周囲で支えようとするのが意思決定支援ではないか。

- 家族は本人の介助を当たり前のようにやっていたので、もしかしたら「親だからやって当然」で、負担とは思っていないかもしれない。「負担ではないか」という支援者側の考えと親の思いがマッチしていない可能性もある。繰り返し支援者や区の方で話をしていく必要があると思う。
- 親に言われて施設入所、帰宅しており、本人はどこにいたいんだろうか。その意思表示が他害行為だったのかもしれない。本人にとって居心地がいい状況はどういうところかが、その行動から見えてくるかもしれない。
- 母が進行性のがんで亡くなるまでの期間、本人と一緒にいる権利すら奪っているとも捉えられる。そういうことを見落とししてしまうケースがいっぱいある。母に子どもと離れるように言ってしまうがちだったり、このタイミングを逃したら次いつでるかかわからない施設の空きなど、そこには本人がいないことが多い。
- 日中の施設でどう自立支援をしてきたか、本人の意思を聞いてきたプロセスは——そういった情報から次のステップや本人の意思確認ができたかもしれない。本人に事前予告すると不穏になることが予想されるというのは、本人に意思があるということ。本人は受け止めることができる人。そういった意味でも計画相談、個別支援計画がどういう形になっていたのかが問われる。そこで本人の意思を拾えていれば、理解の工夫ができていた可能性を感じる。もともと本人が持っていた力を誰が把握していたのかが問われる。
- この方は体験入所中に食事をしない意思表示をした。そんな方が親や社会資源の中でこうした状況になってしまっている。ショートステイも区内では不足しており、継続した利用は難しい。
- ここでは部会として課題を抽出してもらいたい。ショートステイが足りないことはまさに文京区の課題である。課題を抽出して親会に持って行ってもらいたい。

(2)次回事例検討として、精神障害者の方のケースを口頭で説明。

(3)文京区障害者地域自立支援協議会全体会について

資料第7号「文京区障害者地域自立支援協議会全体会のご案内」に基づき、説明。

全体会では、資料第8号「文京区障害者地域自立支援協議会全大会 権利擁護専門部会報告」に記載の内容を報告予定。

(4)その他  
特になし

以上